

# オフィスインテリア再考のヒント

## 空間の機能をITで広げる

ワークスケープ・ラボ 代表 岸本章弘

### はじめに

流動化する組織と雇用、多様化するワークスタイル、それらを可能にするIT。そうしたワークライフ環境の変化によって、人々が集まって働くことを前提につくられてきたオフィス空間と人の関係が変わりつつある。端的には、多くのオフィスワーカーは特定の空間に滞在する時間が短くなる。その結果として、そこでの人々同士の出会いと交流のチャンスが減ったり、人と空間との関わりが薄れたりする。ITによって可能になったワークスタイルが、他方では、従来の物理空間の力を相対的に低下させている可能性があるということである。

前回のコラムでは、そうした状況の下で触媒空間としての機能を高める空間デザインの方策について考えた。今回はITの側に着目しながら、物理空間の機能を補う、あるいは、広げる可能性について考えてみる。

### 電子化された情報環境の影響

情報の電子化の効果については、情報の処理・伝達の自動化や高速化、コミュニケーションコストの低減といったビジネスのスピードアップとコストダウンにつながるものから、場所や時間に制限されない多様なワークスタイル・オプションの提供まで、多岐にわたっている。

しかし、そうした直接的な効果と共に現れてくる間接的な影響の中には、重要だがあまり意識されていないこともある。冒頭に触れたような、空間と人の関わりが薄れ、人と人の関係が

流動的になることも、そうした影響の一つである。そして、多くの人が実感しているであろうもう一つの影響としては、背景あるいは文脈的な情報が伝わりにくくなっていることが挙げられるだろう。日々の活動の中で、リアルな場と体験の共有を通じて自然に見えたり聞こえたりして伝わっていた暗黙的な情報が減っているのである。

例えば、机の上に置かれた資料や道具から仕事の内容が垣間見え、掲示板の貼り紙によって重要な情報の存在に気付く。あるいは、電話する声から仕事の状況を察知する。さらに、そうした情報が人と紐付くことで、組織や人間関係の把握を助ける。かつてのオフィスでは当たり前存在していた、こうしたバックグラウンドの情報流通チャンネルが、今日のオフィスではITの導入とともに消えつつある。仕事の道具が書類からPCに移行し、常に周囲から見えていた机上周辺の情報がモニター画面上に表示されるようになり、外出時や退社時にスイッチを切られれば見えなくなる。いつも周囲に聞こえていた肉声の会話も、道具が電話からEメール経由に変わったことで聞こえなくなる。

もちろん、情報の電子化の影響はこうしたネガティブ側面ばかりではない。ひとたび電子化されれば、距離の制限を受けずに伝えることができるし、複数の拠点に同時に配信することもできる。その形式も、テキスト・音声・画像など、状況に応じて柔軟に変換することができる。つまり、計画的あるいは意図的に、特定の時間



写真1-2：オフィスの随所に設置されたディスプレイから、さまざまなビジネス情報が配信される。(Bloomberg)

と場所で見せたり聞かせたりすることが可能になる。以下では、こうしたIT情報環境の影響や特性に着目し、それらを活用したオフィス空間の可能性を見てみよう。

### 多様なコンテンツを配信する

インテリア空間に配置されたモニターやスクリーンは、多様な形式の情報を遠隔制御しながら伝えることができるという点において、ポスターなどの紙媒体に勝っている。ストーリー性のある動画情報や、刻々変化するニュース情報の配信に適した媒体と言えるだろう。近年の技術革新によって、大型化・薄型化・高解像度化・低価格化が進むディスプレイは、導入に伴うさまざまな障壁を取り払いつつあり、今後はインテリアの一部としての多様な用途の開発が期待できるだろう。(写真1.2)

### 行為に反応させる

ディスプレイから配信されるデジタル情報は、一方向だけの配信にとどまらず、プログラミングによって受け手との間のインタラクティブな関係をつくることもできる。コンテンツを選択・操作するインターフェイスを組合せれば、受け手のニーズに応じてオンデマンドな受信が可能になる。あるいは、センサーとディスプレイを組合せたデジタルサイネージの技術を活用すれば、そこにいる人を認識しながらタイムリー



写真3：オフィス受付の背後に設置された大型ディスプレイには、この会社が扱うビジネスブランドの情報が次々表示される。



写真4：見る人の興味を引き付けるインタラクティブな仕掛け。カウンター手前に立つ来客の右手に置かれた大型トラックボールを操作すると、目の前の地球がゆっくりと回転する。(IAC)



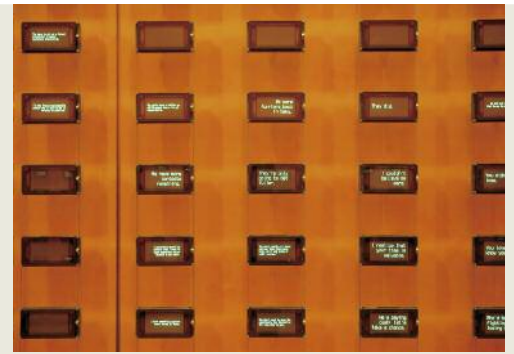


写真5-6：新聞社の本社ビル1階のパブリックロビーに設置されたメディアインスタレーション。小型ディスプレイにはニュースやブログから抽出されたコンテンツが、アーティストの開発したアルゴリズムによって記述され表示される。上層階のニュースルームから配信される情報をほぼリアルタイムに反映しており、記者達の活動が感じられる表現。  
(New York Times)

に多様な情報を配信することもできる。ともすれば見過ごしがちになりかねない配信情報への興味を惹き付け、受信者の条件やニーズに応じてカスタマイズされたコンテンツを届ける工夫が望まれるところである。(写真3.4)

### 活動を感じさせる

用途に応じてさまざまな加工ができることも、電子化された情報の利点だろう。オフィスの中では、日々膨大な量の情報が作り出され、同時にさまざまな行動が記録されている。コンテンツの作成者や利用者の情報、ネットワークへのアクセスや通信の状況、あるいは特定の部屋の入退室の記録やエネルギーの使用状況など、さまざまな情報が蓄積されているはずだ。

そこで、人々がビジネス活動の中で日々作り出すコンテンツや、行動のログデータの中から、

特定の条件に沿って情報を収集し加工すれば、さまざまな情報を可視化することができる。身近なところでは、省エネルギー・省資源への意識を高めるために、電力使用の推移やコピー用紙の消費量を見せることなどもその一例だろう。そうした収集・加工する情報の対象として、人々の多様な行動の記録を活用すれば、これまで見えなかった活動の状況を可視化し、さまざまな文脈情報としての活用の可能性が生まれる。その表現方法も、具体的なレポート形式から抽象的なアートまで、幅広いバリエーションが考えられるだろう。(写真5.6)

### タイミングを教え、行動を促す

ITの活用によって人々の移動性が高まり、非定住型・分散型のワークスタイルが広まれば、オフィスのマグネットスペースは、人々の出会



図1：仲間の行動を感知し、交流の場へ誘引する仕掛け。手許のカップがぼんやり光ると、それは予め登録したメンバーがマグカップを持ってラウンジにいる、というサイン。「同僚が休憩モードで今ここにいる」ことを知らせるメッセージになる。(注)

(注) 岸本章弘、他(2006)「分散ワークスペース群をシームレスにつなぐ」『EICEFFO』コクヨ機 Vol.48 pp.65-70



写真7-8：アナログインターフェイスとデジタルインターフェイス。双方を効果的に活用することで、オフィスはもっと多層的な情報流通の場になる。

いと交流を促す役割を十分に果たしにくくなる。そうした触媒空間としての潜在力を効果的に発揮させるために、ITを活用することもできる。例えば、誰かがラウンジにやってきたとき、その人を認識し、周囲にいる関係者に対して「今、あなたの同僚がラウンジにいます」とさりげなく知らせる機能を環境に組み込む。知らせを受けた同僚は、タイミングが良ければ「自分も行ってみよう」ということになるだろう。(図.1) 分散する人々の行動を感知し、必要な人にタイムリーに伝える。離れて働くメンバーの状況を把握するために使われることの多いアウェアネス情報を、空間と組合せて活用するわけである。

### 気配を伝え、痕跡を残す、インターフェイスとしての空間

かつて、多くのオフィスワーカーが、同じ時間帯に同じ場所に集り、安定した組織の一員として働いていた頃、人々は豊富な文脈情報を共有していた。いわゆる「同じ釜の飯を食う」状態である。しかし今、組織の流動化とワークスタイルの多様化とともに、そうした関係は希薄になり、以前のように互いを知り情報を共有する機会も減っている。

しかし一方で、知恵を集めて協働すべき仕事

は増えている。そのため、チームメンバーは互いの能力や経験を知り、基盤としての知識や問題意識の共有のために、より多くのコミュニケーションの時間が必要になっている。

こうした状況を支援するオフィス環境には、これまでほとんど無意識に交換され、共有されてきた多種多様な文脈情報を、新たなチャンネルで集めて伝える工夫が必要だろう。柔軟な組織とワークスタイルのあり方を阻害することなく、テクノロジーを活用して、多様な文脈情報の蓄積と共有を促す仕掛けを、環境の中に埋め込む。活動する人々の気配を伝え、痕跡を残し、さまざまな情報を可視化する、インターフェイスとしての空間のデザインが求められているのである。

(写真7.8)



岸本章弘

ワークスケープ・ラボ代表

コクヨ(株) 設計部門でオフィス等のデザイン、研究部門で先進オフィス動向調査、次世代オフィスコンセプト開発とプロトタイプデザインに携わり、

研究情報誌『ECIFFO』の編集長をつとめる。2007年に独立し、ワークプレイスの研究とデザインの分野でコンサルティング活動をおこなっている。千葉工業大学、京都工芸繊維大学非常勤講師等を歴任。

著書に「NEW WORKSCAPE—仕事を変えるオフィスのデザイン」。日本オフィス学会国際動向研究部会部会長